

【安藤昌益研究の最前線（その3）】

安藤昌益の門人・志津貞中〔大坂・西横堀の住〕＝
志津大二郎の著書『四聲占考』の発見とその考察

ANDO SHOEKI and SIZU TEICYU (=DAIJIRO)

和田耕作

(Kosaku Wada)

1 はじめに——志津大二郎の著書『四聲占考』の発見

私は、かつて「安藤昌益の門人・志津貞中について——大阪の医師・志津大二郎」（「安藤昌益研究会会報」十三号、一九八三年十月、拙著『安藤昌益の思想』（一九八九、甲陽書房）に収録）を發表し、昌益の門人・志津貞中は、大阪の医師・志津大二郎である可能性が高いことを述べた。その後、多くの研究者たちが「志津貞中＝志津大二郎」説を採用し、今日に至っている。例えば、萱沼紀子『安藤昌益の学問と信仰』（一九九六、勉誠社、81頁）など。

上記の拙論において述べたように、大阪の医師・志津大二郎には、『四聲占考』と『素問入式運氣解』の二冊の著書があったことが書籍目録から判明していた。しかし、これまでにこれら二冊の著書は、発見されていなかった。

私はこのたび〔2017年6月13日〕、早稲田大学図書館「千厓文庫」から『四聲占考』を発見することができたので、以下に紹介したい。

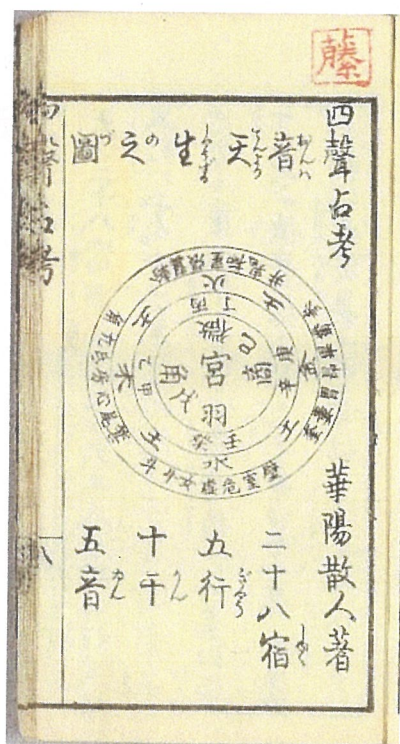
なお、上記の拙論を一読していただいてから、以下を読んでいただければ、さらに理解の助けとなるであろう。

2 『四聲占考』の構成と目次

『四聲占考』（一冊、早稲田大学図書館千厓文庫所蔵）は、タテ143ミリ×ヨコ57ミリの小和本（四十四丁）である。

著者名は「華陽散人」と記されているが、すでに「上記の拙論」において述べたように、大阪の医師「志津大二郎」の著書である。

なお、『享保以後江戸出版書目』では、作者として「花陽散人」とある（上記の拙論参照）が、正しくは「華陽散人」であることが明らかとなった。



『四聲占考』の構成は、以下のとおりである。〔表＝オ、裏＝ウ〕

- ・ 占考題言（せんこうだいげん）・・・・・・〔表紙のウラ〕
- ・ 四聲占考 叙・・・・・・〔一丁オ～二丁オ〕
- ・ 凡 例・・・・・・〔三丁オ～五丁ウ〕
- ・ 四聲占考 目録・・・・・・〔六丁オ～七丁ウ〕
- ・ 本文・・・・・・〔八丁オ～四十三丁ウ〕
- ・ 跋・・・・・・〔四十四丁オ～四十四丁ウ〕
- ・ 奥付・・・・・・〔裏表紙の前〕

跋文に「宝暦六 丙子歳 仲呂 門人 惟齊 識」とある。

奥付は、以下のとおりである。

「
臨玄堂蔵版

宝暦六 丙子 霜月 出版

大坂 博労町心斎橋筋

発行書林 西田屋利兵衛

同 清水町三体橋筋

本屋 又兵衛 』

「西田屋利兵衛」は、大坂にて、宝暦七年四月から安永二年三月まで営業。（『享保以後板元別書籍目録』坂本宗子編、清文堂出版刊、昭和五十七年による。以下、「版元別書目」と略称す。）

『享保以後江戸出版書目』では、『四聲占考』の板元として「西村や利兵衛」とある（上記の拙論参照）。しかし、「西村や利兵衛」の出版物は、『四聲占考』のみであることから、これは多数の書籍を刊行している「西田屋利兵衛」が正しいことが、本書により明らかとなった。

「本屋又兵衛」は、延享四年七月から文化四年四月まで、大坂島之内綿袋町・博労町にて営業（「版元別書目」による）。本書の発見により、これに「清水町三体橋筋」を追加すべきである。

◎本文〔八丁オ～四十三丁ウ〕の目次◎

〔Ⅰ〕

- 一 音（おん）は天に生ずるの事 並 図

〔八丁オ～九丁オ〕

- 一 声（こえ）は地に成るの事 並 図

〔九丁ウ～十丁ウ〕

- 一 音と声とにて考がへ様（よう）の事

〔十一丁オ～十二丁オ〕

- 一 いろはにて四声（しせい）の事

〔十二丁オ～十三丁オ〕

〔Ⅱ〕

- 一 人事（じんじ）の考へ 並 失物（うせもの）の事

〔十四丁オ～三十六丁ウ〕

〔Ⅲ〕

- 一 四声 五調子と為（な）るの弁 並 図

〔三十七丁オ～三十八丁オ〕

- 一 五調子より十二調子を生ずるの事

〔三十八丁オ～三十八丁ウ〕

- 一 十二調子の弁

〔三十八丁ウ～四十丁ウ〕

- 一 十二調子にて日々の吉凶の事

- 一 十二調子にて天時（ひより）の考へ

- 一 十二調子にて一切（いつさい） 進退・動静の事

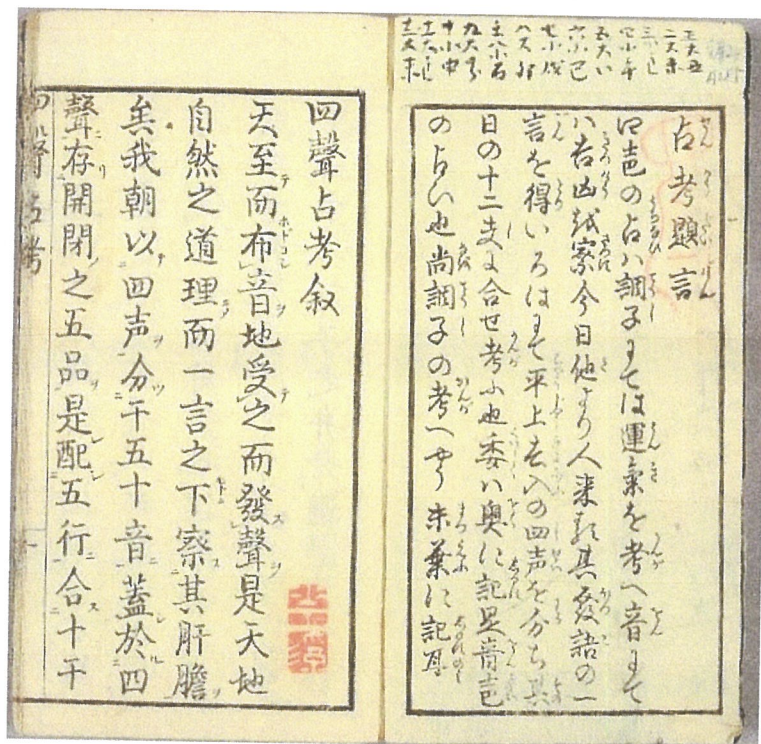
〔四十丁ウ～四十三丁ウ〕

本文は、以上のように〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕に分けられ、〔Ⅱ〕の「人事の部」

〔十四丁オ～三十六丁ウ〕が、その中心を成している。

3 『四聲占考』の内容と安藤昌益との関係について

巻頭の「占考題言」には、本書の目的が簡潔に述べられている。



「四声の占（うらなひ）は、調子にては運氣を考へ、音（おん）にては吉凶を察す。

今日 他（た）より人来（きた）る 其の発語（はつご）の一言（ごん）を得（とり）、
 いろはにて 平（ひょう）・上（じょう）・去（きよ）・入（にゅう）の四声（しせい）
 を分ち 其の日の十二支に合せ考（かんが）ふなり。」

「四聲占考 叙」では、以下のように「天地自然ノ道理」や「天地ノ自然ニ任（まか）ス
 所以（ゆえん）」と、「自然」が強調されている。

「天 至リテ 而シテ 音（おん）ヲ布（ほどこ）シ、

地 之レヲ受ケテ 而シテ 声（こえ）ヲ発ス。

是レ 天地自然ノ道理ニシテ 而シテ 一言（ごん）ノ下（もと）ニ 其ノ肝胆ヲ 察ス。」

「我が 朝、 四声ヲ以テ 五十音ニ分ツ。

蓋シ 四声ニ於ル 開閉ノ五品 存（あ）リ。

是レ 五行ニ配シ、十干・十二支ニ合ス。

剋限ヲ以テ 相生・相剋ヲ別（わか）チ 万緒（よろづ）ノ吉凶ヲ考（かんが）フルニ、
 毫厘モ 差（たが）フコト無シ。

是レ 私智ヲ以テ 焉（これ）ヲ推（お）スニ非ズ。

天地ノ自然ニ任（まか）ス所以（ゆえん）なり。」

このように「自然」というものを強調している点は、安藤昌益の思想につながるものを見ることができる。しかし、本書全体の中に、いわゆる「昌益用語」と言われるものはみることができない。

だからといって、「志津貞中」＝「志津大二郎」説が否定されたわけではない。なぜなら、昌益の刊本『自然真営道』（宝暦三年）と本書『四聲占考』（宝暦六年）の成立時期は、ほぼ同時期であり、『四聲占考』は、「志津貞中」＝「志津大二郎」が昌益思想の本格的影響を受ける以前の著作と考えられるからである。

門人の跋文には、

「此の書は 先生 崎港（きこう）に於て 伝授す。

日々に用いて 疑心 既に亡び 信を存（そん）して 長生す。

茲（ここ）に於て 門人某 梓（あずさ）に鋟（ちりば）め

諸人 日用彝倫（いりん）のため 弘（ひろ）く世に行

（おこな）はれんことを希（こいねが）ふこと、年久し。」

*崎港（きこう）＝長崎港

*鋟梓（しんし）＝上梓

*彝倫（いりん）＝人の常に守るべき道。

とあり、その内容の成立から刊行までには、相当の年月が経過していることがわかる。

4 まとめ

このたび発見された志津大二郎著『四聲占考』（宝暦六年）には、安藤昌益の思想に直接結びつくものは見当たらない。だからといって「志津貞中」＝「志津大二郎」説が、ゆらぐものでもない。

本書は、本邦においてこの一冊のみが確認されたもので、他に見ることのできない資料であることから、貴重なものであることはまちがいない。

「声占い」というユニークな分野の先駆的著作としても、今後活用されるべきものである、ということを指摘して、本書の紹介を終わりとたい。